

私たちはナイフへの理解を深め、正しい使い方を提案し、事件・事故の防止を推進します。

東日本大震災の被災地、被災者の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。  
株式会社ワールドフォトプレス



## CONTENTS

1 TOPICS R.W.ラブレスの伝説を受け継ぐナイフ  
ジム・メリット作「セミスキナー」

4 道具としての刃物

# 剣鉈を使いこなす!!

12 日本のカスタム・ナイフメイカー 特別編

# オーダーメイドの ランチャーナイフ

RANCHER KNIVES by Three Custom Knife Makers



42 Knife Expo 2011 ナイフエキスポ

48 はたらく刃物 船大工

# ダニエル・ファヴァーノ

Daniel Favano

83 カスタム・ナイフメイカー

# 梶村康太 Kota KAJIMURA

90 新たなツールナイフのスタンダードへ

# スイスアーミーナイフ タイタニウム・ライン Wenger "Titanium" Line

22 やっぱり鉄は旨い! ●菊池仁志

62 カスタムナイフ今昔物語2011

35 鍛冶屋フィールドワーク ●かつきせつこ

64 USナイフ事情 ●ヒロツガ

37 実践的道具考 ●星野欣也

66 アメリカ文化とナイフ ●菊月俊之

38 大工道具のかたち ●土田昇/秋山実

68 ハンターとハンティングナイフ ●中條高明

56 TAKE FIVE! ●大東正巳

70 ハンティング・パーフェクション 特別編 ●中條高明

58 インフォメーション

94 ニュープロダクト/読者プレゼント

60 刃体一尺二寸六分、加藤清志作「鰻切り包丁」 96 バックナンバー





▶モリさん愛用の鉈。狐の場合は両刃を主に使い、ビバークを想定した山人り  
の場合は片刃を持って行くことが多い。右から●20歳の時に父親が買って  
くれた土佐物の両刃。／●刀匠でもあった地元の野鍛冶に打ってもらった両刃で  
玉鋼製。／●青森県弘前市の仁唐刃物にオーダーしたもの。形状にわずかな  
湾曲を持たせ片刃で刃長も25cmと長い。青紙。／●CV134鋼のストック&リム  
ーバル。片刃で中野彰治作。剣鉈は柄と本体にわずかに角度がついたものが  
振り下ろしたときに力が入りやすい鞘への取りまわりもよい。材は厚めの6mm。

## 片刃でも両刃でも手にしっくり なじんだものが一番いい鉈

山では剣鉈が一番使いやすいって  
いうと、じゃあ、どんな剣鉈がい  
いんですかってよく聞かれる。難しい  
質問だね。俺が一番だっすすめ  
たからといって使いやすいとは限ら  
ないんだよ。なぜかっていうと、み  
んな手が違うだろう。大きさも握  
りも、腕力も、刃物の扱い経験も。  
利き腕の左右でも違ってくる。木を  
切るんなら片刃がいいけど、両刃は  
木が切れないっていうわけでもない。  
鹿のアバラを真ん中から断つ時は、  
両刃はまっすぐ切れていいけどね。  
少々鋼が甘めでも、しょっちゅう  
研げばなんの問題もない。逆に特殊  
鋼の1枚造りなんて、刃もちは抜群  
にいいけれど、いざ研ぐと硬くて  
容易じゃねえよ。基本は最初の1本  
をとにかく使い倒してみること。  
自分の手になじませること。よしあ  
しを語るのはいくらもだ。



## 握りはカスタマイズする



モリさんが新しい1本を買った時にまず行なうのは、握りに手を合わせる。ボートのエン  
ジン修理などで目ざから力を使うモリさんの腕っぶりは強いが、手のひらは小さめだ。「い  
くら腕力があっても、ちゃんと握れていないと振り下ろした時に力が生かないし危ない」。モ  
リさんの握りには、刻みを入れたり削り込むなど工夫の遍歴が見られる。

カッパ（口金）などの仕上げも買  
う場合のチェックポイント。安価な  
ものには金属パイプを輪切りにし、  
そのままはめ込んだようなものも  
見られる。指が当たると使いにくい  
ので面取りしてあるものがよい  
（自分で削っても可）。カッパが緩  
んだり、中子がガタついてきたら  
迷わず柄の交換を。市販品の柄材  
は軽が多い。丈夫だが滑りやすい  
ので、器用な人は自分ですべりに  
くい材質に替えるのもいい。



高柳盛芳（たかやなぎもりよし）

昭和29年生まれ。群馬県みなかみ町在住。  
自動車整備工、バーテンダーを経てポートシ  
ョップを経営。その傍ら自然ガイドを行なう。  
熊の忍び狐、および射撃の名手としても知  
られる。利根沼田狐友会監事。著書に「モ  
リさんの野遊び作法」（小学館）



## 奥利根の山番長に聞く 剣鉈を使いこなす!!

「最も現場で役立ったのは剣鉈タイプのナイフ」。これは地震と津波で被災した陸前高  
田市の救援活動に従事した自衛隊員が、6月号の本誌トピックページで語った言葉だ。  
剣鉈とはそもそもどんな刃物なのか。奥利根の自然ガイド、高柳盛芳さんに聞く。

文：かくまつとむ／写真：和田悟

大は小を兼ねる。  
自然の中で一番  
応用の効く刃物が  
先の尖った剣鉈

あ、山に入るときは忘れず腰に  
鉈を提げていくね。俺がいつも行く  
のは利根川の源流。ダムの上の奥に深い  
原生林があって、釣り人とか沢登り  
の人、自然体験をしたっていう人  
をポートで案内するのが俺の仕事。  
山菜やきのこ、熊も獲りに入るよ。

こういう深い山では、帰れなくな  
って泊まんなきやなんないこともあ  
るんさ。そんなときに役立つのが鉈  
だよ。テントがなくても鉈さえあり  
ゃあ寝場所を作れる。ビニールを天  
幕にするのが簡単だけど、ビニール  
がないときは笹や小枝を鉈で刈って  
葺けば、小雨ぐらいはしのげる。

雨の中で火を起すしかないとき  
は、新聞紙なんか役に立たない。太  
めの枯れ枝を削って着火用のチップ  
にするんさ。ポケットナイフもあつ  
たほうがいいけど、俺の結論からい  
うと、山で一番使いやすい刃物は、  
先が尖って重みのある剣鉈だよ。

樵が使うのは角鉈だよ。木しか  
切らねえから切っ先はいらねえ。で  
も、鉄砲ぶったり山の中で泊まるこ  
きは、切っ先の尖った剣鉈のほうが  
なにかと応用が効いていい。ポケッ  
トナイフは鉈にならないけど、剣鉈  
はナイフとしても使えるからな。

俺はじめて剣鉈を持ったのは狩  
猟免許を取った20歳。親父が買って  
くれたんだ。鉄砲ぶちとしての旅立

ちの記念だね。俺らがガキの頃は刃  
物がおもちゃがわり。よく家の鎌や  
角鉈の刃を欠いちゃあ怒られたもん  
だけど、剣鉈だけは親父も絶対  
使わせなかったよ。鉄砲ぶちにとつ  
て剣鉈っていうのは神聖なものなん  
だ。そんな田舎に育ったから、自分  
の剣鉈を持った時はうれしかったね。  
なに、剣鉈を持ってきた？ ちょ  
っと見してみろや。なんだこれ、錆  
がひでえし研ぎもでたらめじゃねえ  
か。こっちは1回も使ってねえな。  
刃物っていうのはありがてえもんな  
んだから、女を扱うように可愛がっ  
てやれや。それで、もつと使えよ。



# Rancher Knives

## made by Japanese Custom Makers

[日本のカスタム・ナイフメーカー 特別編]

# オーダーメイドの ランチャー・ナイフ

●文・写真：長谷川朋之 Text &amp; Photos TOMO HASEGAWA



今回の主役「ランチャー」アラン・ガンスバーガー。5000エーカー（1エーカーは約1250坪）という広大な土地を管理し、何千頭もの牛を放牧し育てるのが仕事。ランチャーとして豊富な知識と経験から、実用的なポケットナイフを探求する。

蛇の存在……。ランチには、わずかな油断が事故に繋がる危険があちこちに転がっている。豊富な知識と経験で日常に潜む危険に対処するランチャーは、アウトドアの達人である。

今回の主人公アラン・ガンスバーガーはランチャーを生業にするひとり。カリフォルニアのヨセミテ国立公園近くの牧場で生活している。

筆者がアメリカで開催される射撃競技会に参加すべく、毎年カリフォルニアの牧場で練習させて頂くようになり、早20年が過ぎた。その間、大自然で活躍するアランの生活を身近に体験するチャンスに恵まれてきた。美しい大自然を敬愛し、



アランがこれまで愛用してきたポケットナイフ。研ぎ減ったブレードが、現場におけるナイフの必要性を物語る。

アメリカでは、牧場の事を「ランチ(Ranch)」、「ヤ」で働く牧童達は「ランチャー(Rancher)」と呼んでいる。

ランチャーたちはいわば現代のカウボーイ。開拓時代から受け継がれる「ワイルド・アメリカ」を象徴する存在とも言える。彼らは何百、何千頭もの牛の世話に始まり、門や柵の補修、大雨で崩れた道路や橋の修理、枯れた大木の解体に撤去など、広大な牧場のメンテナンス作業に追われる多忙な日々を過ごす。馬やモト4（4輪バギー）からの転倒、暴れ牛への対処、ガラガラヘビに代表される毒

### ランチャー愛用の ポケットナイフ

ランチャーの生活で欠かせないもの、それはやはり「ナイフ」だ！

ロープや革のカッティング、牛の去勢や血抜き、イヤマーク（所有者を明らかにするためのしるし）カットやマシンのメンテナンス、さらに手のひらのとげ抜きや噛みタバコの切り取りに至るまで、あらゆる場面でナイフを活用している。欠かせない道具の筆頭だ。

カウボーイのナイフというと、ボウイナイフなどの大型ナイフを、ベルトやブーツから抜き出し、敵を倒す場面を連想してしまふ。だが、それは映画の影響が強い。

実際のランチャーはポケットナイフを愛用していることが多い。中でもS字型のハンドルに2、3本のブレードを備えた、ケースやレシントンに代表されるナイフを主に持ち歩いているようだ。

確かに、大きくてブレードが幅広いナイフの方が、パワーをかけられる分、作業はかどるかもしれない。しかし大型



ジーンズの前ポケットがナイフの定位置。取り出しやすさよりも、いつも同じところに確実に納まっていることが大切だという。



ランチャーは現代に生きるカウボーイ。アウトドアの達人である。そんなランチャー（牧場主）の意見をもとに、浦辺謙三、島田英承、山本徹、3人の日本人カスタムメーカーがナイフを製作。実際に使い込むことで、ブレードの形状やサイズなど、ポケットナイフの実用性が明確になった。構想から5年、長期取材による「誌上コンペ」ドキュメンタリー。



# 船大工

文：かくまつとむ 写真：大橋弘

「仕事の数だけ道具がある」はたらく刃物

国が生活上重要と位置付けた1級河川は全国に1万4000近く。2級河川や支流を含めると、日本には膨大な数の川がある。その水の道をつないで暮らしを支えてきたのが船。もはや忘却の彼方にある水運時代の栄華。その残像と微かな希望を熊野川最後の船大工の仕事に見てきた。



この日造っていたのは、熊野速玉大社の御船祭の先導船となる早船。水押し部分が大きな川船だ。曲げてはぎ合わせたとき、板どうしがきちんと密着するかどうかが船のよしあしの基本となる。

船が日本のあらゆる暮らしを支えていた時代があった

今の時代からは想像すら難しいことかもしれないが、かつて日本の物流や人の移動を担っていたのは、川であり船だった。

明治時代に日本へ来たお雇い外国人の治水技師は、日本の川を見て「滝だ」と驚いたという。国土の7割は山で、そこから集まる流れは押しが強い。台風などの増水期はしばしば暴れ、橋をかけることのできない川も多かった。

大小の川が無数に横たわる日本では、ヨーロッパのように道路輸送が発展しなかった。牛馬や大八車に荷を積んでも、橋のない川に突き当たれば渡し船に積み替えざるをえない。それならば、むしろ川どうしを水路でつないでネットワーク化し、船で運んでしまったほうが効率的である。

帆を張れば船足は驚くほど速くなる。笹船のような小さな船でも、積載量は牛馬や大八車のそれに匹敵する。風のエネルギーをうまくつかめば労せずして移動ができ、牛馬のように餌代もかからない。人の移動にも船は欠かせなかった。池波正太郎の時代小説を読むと、しばしば猪牙舟という小船が

登場する。江戸市中に掘り巡らされた水路を伝って人を運んでくれる、当時の水上タクシーである。

私の住まいに近い利根川沿いには、江戸まさりと唄にも詠まれた佐原を筆頭に、かつて水運で栄えた河岸の町がいくつもある。

資料館に残された昔の写真には、さっぱ船と呼ばれる小船や、大きな帆を掲げた高瀬船が行き来するにぎやかな様子が残っている。

流域の農産物や醤油、酒などの加工品は上流の野田や関宿まで船で運ばれ、そこから運河を通じ、江戸川を経て江戸・東京の市中まで回漕された。

水郷地帯の農民は、小さな田船やさっぱ船に乗って農作業に出かけた。花嫁も小船に乗って水路から嫁入りした。少し前までは、納屋の軒に船を吊るしている農家も見かけたものだ。

## 熊野川最後の船大工は脱サラ・独学の職人

鉄道網や道路網が整備されるまで、経済と暮らしを支えてきた大動脈が木造船による運輸で、その社会基盤を支えてきたのが船大工という職人衆だった。

鍛冶屋の鍛える道具が、地域の暮らしのありようによって変わる

ように、船大工の仕事も地域色が濃い。海の町では、沖の波風にも耐えられる大きな船が求められるため、船大工の組織はおおむね大きい。頑丈な帆柱や舵の羽板作りなど特殊な技術も要する。

川筋には小船を造る船大工がいた。対象が小さいので、ひとりふたりの職人でもこなせる。かといって、誰でもできる仕事ではない。船というのは人の命と暮らしを乗せる道具である。上流と下流では流れの性格が異なり、船の用途も多様なため、船大工は漁師や船頭以上に「水」という存在を熟知していなければならなかった。

木造船の需要は、明治時代の鉄道開通以降少しずつ減ってきたが、とどめを差したのは、戦後普及したFRP（繊維強化プラスチック）を使う造船技術である。船は木を刻んで造るものではなく、工場でFRPを切り張りして作る時代になったのだ。

FRP船は、工場で量産できる素材を使って簡単に製造できることから、価格革命をもたらした。軽く耐久性もあったため、木造船をあつという間に凌駕した。

「僕の若い頃から川船もだいぶFRPに流れとったね。ただ、飛びについてはみだけれど、やっぱり木



鋸盤。上3本はシキ(底板)をはぎ合わせるヌイと呼ばれる船造用のもの。片鋸で、本体は微かに湾曲している。下の両鋸のものは立ち上りの大きな部分をはぎ合わせるためのもの。